



といだぶけやしきあと
問田武家屋敷跡

- 15 問田
1625年頃(近世)

毛利家の永代家老である益田氏の城下町として栄え、田町はその文化の中心地でした。東側入口には木戸が設置され、道幅も現在より広く、片側には松並木があり、多くの武家屋敷が建ち並んでいました。また、天保年間に光厳寺前に大内地区的教育の源流である学習斎という学館も建てられました。この整然とした町割りは、往時の姿に思いを馳せるには十分です。



こうえんじ
光円寺

- 17 中矢田
1630年(近世)

寛永7年(1630)、氷上山法印権大僧都智淵房慶乗を開山とします。ここには、21代弘家(矢田太郎)の墓と伝えられる宝篋印塔と位牌があり、これが良君城という居館跡だと伝えられていますが、現在地名として残っている場所とは異なり、多くの謎に包まれています。また、二義少年の位牌も安置されています。



こうがんじ
光厳寺

- 16 問田
1628年(近世)

寛永2年(1628)、益田孫左衛門により創建され、夫人光勝院殿の位牌所であったことから光勝院と称し、明治3年(1870)、平川村の冷巌寺と合併して光巌寺と改号しました。本寺にある梵鐘と鰐口は市の指定文化財です。門前に祀られている「えんこう地蔵」は、明治初年、問田藤村の土手から現在の地に移されたものです。



にぎしょうねんひ
二義少年の碑

- 18 宮ノ馬場
1711年(近世)

宝永7年(1710)、長野村に百姓一揆が起こりました。翌正徳元年(1711)、清介と角左衛門という二人の青年が直訴し長野村を救いますが、彼らは処刑されました。この碑は、二人の一死救村の事績を顕彰し、明治32年(1899)に建立され、篆額は井上馨、撰文は品川弥二郎、書は長州三筆の一人、宮ノ馬場の野村素介によるものです。



やまねかんのんどう
山根觀音堂

- 19 氷上
江戸時代中期(近世)

このお堂は、氷上山興隆寺の觀音堂を、明治17年(1884)に移築したもので、江戸時代中期の建立とされています。本尊の聖觀音菩薩は、平安時代末の作で檜の一本彫り寄木造りの仏像で、県の指定文化財です。觀音堂の後方の楠の大木には、江戸時代後期の行脚僧、木曽上人の作とされる立木仏があり、今は大木に優しく包み込まれています。



うえだほうようせいたんち
上田鳳陽生誕地

- 20 氷上
1770年(近世)

明和7年(1770)、氷上の宮崎家に生まれ、後に上田家の養子となりました。藩校明倫館で文学の修養に務め、修学を終えると47歳にして、中河原(公設市場跡)に山口講堂を開き教育に尽力、山口大学の基礎をつくりました。生誕地は氷上橋北側に、寓居跡は御堀県住下に、顕彰碑は宮島町の外郎の元祖福田屋横に、そして墓は乗福寺にあります。



すぎまごしちろうせいたんち
杉孫七郎生誕地

- 21 氷上／1835年(近世)

天保6年(1835)、氷上の植木家に生まれ、後に杉家の養子となりました。文久元年(1861)には幕府の遣欧使節に随行し、長州ファイブよりも先に欧洲へ渡り、元治元年(1864)の馬關戦争では副使として、高杉晋作、井上馨、伊藤博文とともに講和談判に臨みました。長州三筆の一人である彼の書は、山口市菜香亭に見ることができます。



のむらもどすけせいたんち
野村素介生誕地

- 22 宮ノ馬場／1842年(近世)

天保13年(1842)、宮ノ馬場の有地家に生まれ、後に野村家の養子となりました。藩校明倫館や江戸有備館に学び、文久2年(1862)、帰藩し明倫館舎長となり、維新後は官命で欧洲を視察の後、茨城県知事、貴族院議員等を歴任しました。長州三筆の一人である彼は香山公園の勅撰銅碑、井上公園の七卿遺蹟の碑など多くの書を残しています。



ういろうがんそふくだや
外郎の元祖福田屋

- 23 御堀
江戸時代末(近世)

福田屋は山口外郎の元祖として、300年以上前から終戦前まで、現在の地で営業していました。ここは御成道萩往還に面しており、藩主の参勤交代、来山した文人墨客、興隆寺への参拜者など多くの人々が訪れ、最盛期の幕末期には湯田の何遠亭と氷上山真光院とを往復した七卿の一人、三条実美も立寄りました。建物は当時の面影をよく残しています。



ぞうずさんちょうぼう
象頭山からの眺望

- 24 宮島町

その昔、ここは仁保川と問田川が櫛野川と合流し山口湾に注ぐ船着場で海路交通の要衝でした。幕末には高杉晋作が「鰐石川の水は即ち西洋に到る」という壮大なスケールの漢詩を詠んでいます。象頭山からの眺めは壮観で、袂の鰐石橋は、明治18年(1885)、明治天皇行幸に際し、板橋から県内最初の近代的な鉄橋に架け替えられ大変珍しかったということです。